グアム島の風[1]

戦地へ

昭和十八年。大東亜戦争（太平洋戦争）が始まって一年七か月がたっていました。当時、二十歳以上のほとんどの男子が戦争に行きました。

わたしは、そのとき十八歳。「アッツ島が全滅[2]」とか「日本海軍が負けそうだ」などのニュースが流れると、「この国を救わなくては」と決心し、志願兵として、両親、兄夫婦、弟妹たちに別れを告げ、村の人たちに見送られて、戦地へ出発したのです。

日本を出発

広島で二十日間ほど訓練を受けたわたしは、海軍の※設営隊の一員として、大型輸送船に乗りこみ、③呉を出発しました。

すぐあとで、新井部隊長から、

「わたしも君と同じ岐阜県の出身だ。これからわたしの※従兵になってくれないか」

といわれました。

それから三年、わたしは新井部隊長といっしょに過ごすことになったのです。

向かう先は、グアム島でした。

しかし、アメリカの潜水艦からの攻撃を受けたり、※魚雷をさけるためにジグザグコースを進むので、なかなか到着しません。

※志願兵……二十歳前に、自分から進んで軍隊に入った兵
※設営隊……建物や機械などを前もって準備する係
※従兵……身のまわりの世話をする兵
※魚雷……水の中を進んで船に命中させる爆弾

その上、甲板へ上がることは禁止されていたので、船底にいたわたしたちは、船が動きを変えるたびにゴロゴロ転がって気持ちが悪くなり、みんな病人のようになってしまいました。

ある夜、わたしはがまんできずに、ひそかに甲板にあがりました。何と気持ちがよいのでしょう。マストのかげで、さわやかな風を体いっぱいに受けると、生き返ったようです。

ところが、監視員に見つかり、はりとばされてふっとび、何日も顔がゆがんでしまいました。

これが軍隊、はじめての経験です。

十五日後、船はようやくグアム島に着きました。

まわりをサンゴ礁に囲まれたこの島は、もともと米軍※が支配していたのですが、

※米軍……アメリカ軍のこと

そのころは日本軍のものになっていました。

わたしたちが上陸したときに警備員はわずか三十人ほどでしたが、かれらと合流したわたしたちは、サイパン島の関係者と連絡を取り合い、さっそく飛行場をつくることになりました。

「第一滑走路は千メートル。第二滑走路は二千メートルに仕上げること」、これが、わたしたちへの命令です。

飛行場をつくるにあたって、守らなければならないことは、いくつかありました。

大切な飛行機を置く格納庫は、敵の飛行機が空からよく見てもわからないようにつくること。

飛び立つ時は、追い風ではなく向かい風が必要なので、風向きをよく調べること。

日本から持ってきた工事用の機械がよく故障するので、あまりそろっていない部品でもちゃんと修理することなどです。

しかし、そのうちに陸軍も到着。海軍の警備隊員も増えて、およそ千人で、結

局、四か所の滑走路づくりにはげんだのです。

米軍の逆襲

ところが、平和に見えていたグアム島も、米軍がじわじわとおそってきました。

そして、昭和十九年三月。大空襲が！

わたしは、日本出発と同時に、新井部隊長の身のまわりのおせわをしていましたが、空襲が続くので、伝令※としても走りまわっていました。

ある日のこと。走っていたわたしの前と後ろに米軍の砲弾が、飛んできました。

あぶない！　地面にふせたとき三弾目が。眼鏡がふき飛び、左目が痛い。いっしょうけんめい走って隊にもどり、命令を報告したときには、左目は、もうほとんど見えません。

顔やひざなどに、爆風でふきつけられた小石や砂が、めりこんでいます。

※伝令……命令を伝えまわる役目の人

しかし、手当てをする間もなく、また次の伝令に走らなくてはなりませんでした。
今度は、海の軍艦から大砲の弾が飛んできました。
目の前の大きな岩場にかくれようとした、その時、亡くなった姉の声がしました。
「そこはだめ。こっちへおいで！」
わたしは声のした方へ走り寄りました。そのとたん、さっきかくれようとした岩がふき飛びました。
また、ある時は、戦友と攻撃をさけて洞窟の中に入ったのですが、何だか胸さわぎがします。じっとしていられなくなり、思わず外へ飛びだしました。
そのとたん、後ろでドカーン！　という音がしました。
ふり向くと、さっきの洞窟が、あとかたもなくふき飛んでいるではありませんか。
亡き姉の声とか、胸さわぎ……。家族がわたしを守ってくれたのでしょうか。おかげでわたしは命びろいをしたのです。
そんな中、飛行場もようやくできて、大砲を撃つための台も増えましたが、かん

じんの燃料や弾が日本から届きません。

そのことを知った米軍は、ここぞとばかりに空から、海からとはげしい攻撃を続けてきました。

米軍がグアム島へ上陸

いよいよ米軍は、グアム島への上陸作戦を開始。たくさんの兵士たちが軍艦から小舟に乗りこみ、次から次へと上陸してきました。

日本軍にはむかえ撃つ弾もなく、武器らしいものはありません。日本兵たちは、「※大和だましい」と「日本刀」と「※ごぼう剣」、最後には「※肉弾」で反撃。一回目は、やっと追いはらうことができました。

しかし、一か月後、米軍はますます大がかりな上陸作戦を開始。島のどまん中を、どっと攻めこんできました。

そのため日本兵は、グアム島の南と北に分かれてしまったのです。

わたしたちの隊では、武器といえばそれぞれが自分の最後のときのためにと持っている「※手りゅう弾」一つと、ごぼう剣と日本刀。それに新井部隊長が身を守るために持っている「十五連発銃」一つと軍刀だけでした。それだけではどうすることもできません。

軍の司令部に連絡すると、

「ジャングルに入って、時期を待て。最終的には島の北側の北岬方面に集まるように」

との命令がありました。

そこで、暗くなるのを待って、全員がジャングルへ逃げこむことになりました。

こうして、グアム島は、再び米軍のものになったのです。

※大和だましい……日本民族固有の勇敢な精神
※ごぼう剣……銃剣
※肉弾……体ごと敵につっこむこと
※手りゅう弾……手投げ用の小さな爆弾

ジャングルの日本兵

グアム島の山も丘も、すさまじい米軍の爆撃で形が変わり、その上、ジャングルに向けて逃げていく日本兵を追って撃ちまくるので、折り重なって倒れた兵士たちで、あたりのようすはまったく変わってしまいました。

「グアム島の川は、長い間血の色で染まっていた」

と島民たちは、いったそうです。

ひとすじのけむりを見ても、木の葉が風でそよいでも、米軍は、だれかいるのかと機関銃でダダダダ……と、撃ちこんできます。

こうして、日本兵たちの命は、しだいに失われていきました。

わたしは、必死ににげている時、たおれていてもうだめだと思われる兵士たちに出会うことがありました。

息を引き取る前に、かすかな声で呼ぶのは、「母さん」とか「おっかあ」「お母さ

ん」という言葉。みんな、そういうのです。でも、わたしにはどうしてあげることもできません。わたしだって、いつそうなるかわかりません。機関銃の音が近づいてくるようです。わたしは手を合わせてその場を立ち去るより仕方ありませんでした。

わたしも、つらくてどうしようもない時は、

「かがまあーっ」

と呼んでみました。

大粒のなみだがころころと出たあとは、不思議に心が休まり、新しい力がわいてくるのです。

そうして、また気持ちを引きしめ、ジャングルの生活を始めることにしました。

まず、食べ物は、どうするのか……。

くつ下の中に入れてこしに巻きつけていたわずかな米は、青カビで固くなっていましたが、岩の底にたまっていた水で洗って、鉄カブトでにました。

それを大きな葉っぱに分けて、新井部隊長や戦友とすすり合って食べました。そのおいしかったこと。

その後の長いジャングル生活の中で、ときどき思い出しては、つばを飲みこんだものです。

そのうち、島のあちこちにある米軍のゴミ捨て場を見つけました。底の方に残っているかんづめとか、ちょっとカビのついているパン、においの悪くなったコーヒーなど。

日本兵たちは夕闇を待ってジャングルから出てくると、それらをもらっていきました。ありがたい食料倉庫です。シャツもくつもありました。

しばらくして、そのことに気づいた米軍は、ゴミを捨てるたびに、ガソリンをかけて焼くようになりました。こうなると、ほかに食べ物を探さなくてはなりません。

あちこちにカエルはいますが、一口食べると舌がしびれる毒ガエルが多くて、ダメ。それならと野生のぶたをつかまえて、「しばらくは、だいじょうぶ！」と喜ん

だのもつかの間、暑さですぐにくさって捨ててしまいました。
何といっても助かったのは、グアム島はいつも夏のような島。木にはいっぱい実がなっています。中でもヤシの実は栄養もたっぷりとか。これで、何とかやっていけそうです。

北岬へ

しかし、わたしの部隊も、はじめは二十三人でしたが、はぐれたり死んだりして、とうとう部隊長とわたしともう一人の、三人だけになってしまいました。
そのかれは、あまり体がじょうぶでない上に、食べ物があわなかったのか、ずっと下痢が続いていました。立っているのも苦しそうで、
「もうこれ以上は、ジャングルの中を歩けない。二人に、迷惑はかけられない」
となやんでいるようでした。
「心配するな。食べ物を探してくるから、かならず寝てるんだぞ」

と、かれ草の上に寝かせて、部隊長とわたしが、洞窟をはい出したとき、奥の方で、ドーンという、にぶい音がしました。

おどろいて引き返してみると、苦労を共にしてきたその戦友は、自分の最後の手りゅう弾を使って、※自決していたのです。

何ということを！　「最後までいっしょに生きぬこう」とちかったのに……。かれの気持ちを思うと、いつまでもなみだがあふれて止まりませんでした。

とうとう二人きりです。

米軍の監視はますます厳しく、わたしは、体の弱い部隊長を守りながら、食べ物を探しては、集合地の北岬に向かっていっしょうけんめい逃げ歩きました。

北岬は、島の北のはずれにあります。

そのあたりに、サンゴ礁にじゃまされないで船を着けられる岸壁があるとか。日本軍がグアム島の兵士たちを救い出しにくるなら、そこしかありません。

※自決……みずから命をたつこと

わたしたちは、何とか北岬にたどり着き、いくつかの洞窟をあちこち移りながら、船を待つことにしました。

ここでも、木の実を探さなくてはなりません。人が住んでいる村の近くには、マンゴーやパパイヤ、パンの木、バナナなどおいしい実がいっぱいありますが、どこにでもあるわけではありません。

タロ芋を、どろごとかぶりついたり、あせをかくので塩分がほしくなり、暗くなってから海水をガブガブ飲んでおなかをこわしたり。ヤドカリをからごとバリバリかじり、ひどい下痢になったこともあります。しかし、食べられるだけでも幸せです。

何日も食べ物にありつけず、うろちょろしているネズミをつかまえて、夜に岩かげで焼いて食べたこともありました。

小便くさいような味でしたが、「ごちそうだ！」と思わずなみだがこぼれました。

時には、やせて骨ばかりのわたしのうでの血を吸った蚊を、つまんで食べたり、

とにかく食べられそうなものは、何でも二人分ずつ探す日が続きました。

わたしにとって、新井部隊長を守ることが、使命だったのです。

あちこちと逃げ歩いて、最後に見つけたところは、険しいがけにある洞窟。底にきれいな水がいつもあり、ここに住みつこうと決めました。

わたしは、いつも体から離さずに持っていた自決用の手りゅう弾と、ごぼう剣を、洞窟の中のたなのようなくぼみにかくし、そこから食べ物を探しに出かけていきました。

しかし、そのうちに、わたしも長いジャングル生活で体の調子が悪くなっていきました。

身が軽いのが自慢だったのに、高いヤシの木にすずなりの実を見つけても、登ることも切りたおすこともできず、あきらめることが多くなりました。

これから先、食べ物は、どうしたらいいのでしょうか。

米軍からの呼びかけ

ある日、米軍はすべての攻撃をぴたりとやめて、島の上や浜辺の方から、スピーカーでわたしたちに呼びかけ始めました。

「ジャングルの中の日本兵たちよ。日本は戦争に負けたのだから、早く出てきて降伏しなさい」

ちゃんとした日本語です。しかし、「戦争に負けた」とか「降伏しなさい」、つまり、「負けたことをみとめなさい」というのは、いったいどういうことでしょうか。信じられません。

米軍は毎日、いろいろな情報を取り入れては、次々と呼びかけてきました。

日本兵たちは、なかなか出ていきませんでした。出ていけば、どうなるのでしょうか。

すると、こんどは新井部隊長の名前を、スピーカーで呼びかけてくるではありませんか。

「新井部隊長殿。あなたが、そちらにおられることは、わかっております。あなたが出てこられれば、多くの日本兵が救われます」

それを聞いた新井部隊長は、

「自分が出ていけば、多くの日本兵が救われるというのか……」

じっと考えこんでおられました。やがて、

「みんなが救われるのなら、行ってみよう」

と、決心されたのです。

「それなら、自分も同行します！」

わたしは強く申し出ました。

「いや、どうなるかはわからないのだ。とりあえずわたしが出かけてみる」

部隊長は、わたしをふり切るようにして、一人で浜辺の方におりていかれました。

浜辺には、米軍のえらい人が出むかえました。

そのそばに、前に新井部隊長の部下だった一人の日本兵がいました。かれは、す

でに米軍の捕虜となっていたのですが、部隊長を探しだすために、いっしょに来ていたのです。

部隊長は、かれからいろいろと話を聞いて、「日本が戦争に負けたこと」を確認されました。

そして、決心すると、スピーカーを通して、ジャングルにひそんでいる日本兵たちに向けて、

「すぐに出てくるように」と呼びかけました。

そのとき、多くの日本兵たちが、ジャングルから出てきました。

わたしも、手りゅう弾と、ごぼう剣を洞窟のたなの奥にかくしたまま、米軍の捕虜となったのです。

収容所の生活

わたしたちが連れていかれたのは、柱がヤシの木、屋根もヤシの葉でつくった、

「スターケ」という収容所。まわりをぐるりと金網で張り、その外をまた金網が。金網と金網の間には、いつも銃を持った番兵が見まわっていました。

一つのスターケには五、六十人の日本兵がいました。土間にダンボールやヤシの葉をしき、その上に毛布を一枚しいて、もう一枚はかけて寝ます。

トイレは、土中に穴を深くほり、その上に木のイスを置いた「ふた付きトイレ」。毎日、ガソリンをかけて焼くので、とても清潔です。

米兵は、日本兵に対して意外に温かく接してくれ、食べ物も住まいも十分で、ひどいあつかいをされることはありませんでした。

そんな中で、わたしたちへの取り調べが始まりました。

気になっていた新井部隊長は、米軍が取り調べをした結果、戦争で重要な役目をしていた人物ではないかということで、わたしたちと引き離され、やがてアメリカ本土行きが決まったようでした。

※捕虜……敵に捕らえられた人

わたしの従兵としての任務は、こうして終わったのです。

日本へ！

昭和二十一年ごろの収容所には、だいたい千人あまりの日本兵が暮らしていました。

来る日も来る日も、金網の中。日本へ帰りたいとあせったり、やはり望みはないのかと失望していたある日のこと。日本へ帰してくれるらしいとのうれしいニュースがまいこみました。

ついに来た！　とわたしたちはかたをだき合い、喜んで泣きました。

数日後、全員に「故郷へ手紙を書くように」と紙が配られました。

「年老いし父上、母上様はじめ皆様。いかがお暮らしでしょうか」

わたしは、収容所で苦しい中でも望みを持ち、帰国の日を今か今かと思いながら暮らしている、というふうに書きました。家族の喜ぶ顔が目に見えるようでした。

いよいよグアム島を離れる日。
米軍の兵士たちは、収容所から港までわたしたちを守ってくれ、輸送船に乗りこむと、英語で「蛍の光」を歌って、別れをおしんでくれました。ほんとうに、みんな心やさしい人たちばかりだったと思います。
こうして、捕虜となっていた日本人の全員が、家族の待つ、なつかしい日本へ送りかえされたのでした。

四十年後、グアム島へ

昭和六十二年一月。
わたしたち夫婦は、息子たちのすすめで、グアム島へ旅行しました。
ホテルから砂浜を見ると、日本から来たハネムーンの人や、若いグループがいっぱいで、楽しそうです。とても複雑な気持ちでした。

そのとき、北岬には行けませんでしたが、わたしたちは、ジャングルのそばに建てられた平和寺におまいりしました。このあたりでは、穴をほると、まだ人骨が出てくるそうです。

何となくふく風の音も、なくなった人たちが悲しそうに泣く声のように思われて、「どうぞ安らかにねむってください」と祈り、心から手を合わせました。

このグアム島のジャングルで必死に戦い、若くして散っていった戦友ひとりひとりのことを、わたしは絶対に忘れることはできません。

（原作　中矢（旧姓　砂田）正雄「玉砕地　グアム島の風」）